

## 【論文】

## nLDK批判をめぐる諸理念・諸議論の系統的整理：前編 — 計画学のための基礎的考察 その2 —

江上 徹

### The Methodical Arrangement of Ideas and Discussions Connected with Criticism of nLDK : the first half

— A Fundamental Study for Planning Theory Part 2 —

Toru EGAMI

**Abstract-** Criticism of nLDK increases in these days with relation to criticism of Architectural planning theory, but ideas connected with it are not understood correctly and discussions are not accumulated. So we aim at the methodical arrangement of ideas and discussions connected with criticism of nLDK. In this paper we research the significance and the limits of three housing ideas, namely 51C, modern living, ko-shishitsu type that were brought at the postwar years.

**Keywords :** nLDK , planning , 51C , modern living , ko-shishitsu type

## 1. はじめに

昨年2月に東京で開催された連続シンポジウム「51Cは呪縛か」は大きな話題を呼び、10月にはその成果をまとめた「51C 家族を容れるハコの戦後と現在」が平凡社から出版された。このシンポジウムの案内リーフには次のようにその主旨が述べられていた。

「nLDK」をいかにして潰すか。この現代の建築界の課題の裏には、未だに呪縛のように戦後の合理化の建築計画による「51C」の影を引きずっているのではないか。既に過去のものとなったはずの「51C」が、なぜ長年にわたって語りつづけられるのか。そしてなぜ、現代の建築家たちはそれに呪縛されつづけるのか。

前報で、近年の建築計画学批判はnLDKへの批判と絡めてなされることが多いと指摘したが、上記の案内文にはその典型が示されていよう。nLDKをいかにして潰すかが現代の建築界の課題であり、その背景には建築計画(学)の影があるというのである。また前報では、建築計画学の「学」がニュートン力学以来の近代科学の「学」ととらえられ、そこでの法則(性)概念も物質運動レベルでのそのような

\* 建築学科

一義的なものとイメージされるため、その成果に基づく提案や指針が固定的なもの、高度に規定的なものとして受けとられてしまう可能性についても言及した。上記の案内文やシンポジウムのタイトルにも現われる「呪縛」という言葉がこの可能性を象徴的に物語っている。

このように「51C」⇔DKを起点としたnLDKへの批判は今日の建築計画学批判の焦点、中核であると言ってもよいであろう。また、nLDKに対する批判は建築や住居の専門誌だけではなく、週刊誌でとりあげられるほどに一般化もしている。にも拘らず、nLDK批判に関わる諸理念は必ずしも正確に理解されておらず、従来の諸議論も積み重ねや蓄積という形にはなっていない。「新建築」に12回にわたって「集合住宅をユニットから考える」という連載を行った渡辺真理と木下庸子はその第一回目(「新建築」2000年12月号)で、「このところ建築の分野ではnLDKはきわめて旗色が悪いようである。nLDKを堅持しようという保守派と進歩的なケンチクカが争っているが、時代の趨勢はすでに脱nLDKなのであるというようなまことしやかな言説がまかりとおっている。時代に乗りやすいのがケンチクカの属性であることを認めるのはやぶさかではないとしても、学生たちもがnLDKの時代は終わったというようなことを得意そうにレポートしてくるのを見ると、そ

の短絡さ加減に今度は逆の意味で危惧を覚えてしまう」と述べている。また、「『51C』は呪縛か」シンポジウムにおいて、パネリストの一人である上野千鶴子は「建築史に無知なものだから、今日は発見に次ぐ発見です。「公私室分離」という言葉を聞いておもしろいと思いました」と発言したが、nLDK批判の騎手たる人にしてこのレベルという面があるのである。こうした現状に鑑み、本論ではnLDK批判に関わる諸理念、諸議論を系統的に整理し、それを検討する中からこの批判の意義や限界、これからの住宅計画の課題について考えてみたい。ここでは先ずその前半部として、結果的にnLDKにつながっていく戦後の新しい住居理念について述べる。

## 2. 戦後における新しい住居理念の提起

「『51C』は呪縛か」シンポジウムを企画した山本喜美江は、「51C=nLDKと思っていた」という旨のことを述べているが、むしろそれは誤まったとらえ方である。確かにある意味では51C型はnLDKにつながってはいるが、それ以外にもnLDKにつながる重要な提案がなされており、しかもそれらは直ちにnLDKなのではなく、幾つかの媒介を経てnLDKに帰結したと考えられる。51C型を始めとする諸提案は一方では大正時代からの生活改善運動、住宅改善の流れや昭和の戦中期に誕生した住宅計画学の理念を受け継ぎつつ、他方では敗戦による膨大な住宅不足の解消や、戦後の民主化に応じた新しい住生活像を目指すという動きの中で生まれたものである。

### 2-1 51C型

51C型とは1951年度の公営住宅の標準設計の一つであり、その原案は標準設計委員会のメンバーであった吉武泰水の研究室に所属していた鈴木成文が中

心となって作成されたものである。51C型の第一の特徴は後にダイニングキッチン=DKと呼ばれるようになる「食事のできる板の間の台所」であり、第二の特徴は親と子どもの就寝分離を可能とする壁で区切られた二つの寝室である。特に前者は後述するように戦後の日本の住宅に非常に大きな影響を与えることとなった。近年でこそ戦前と戦後の連続性に着目する議論が幾つか現われているが、かつては1945年を境にして戦前と戦後の断絶に力点を置く考え方が強く、今日でも大勢としてはそうした見方が一般的であろう。それ故51C型の提案も、一見すると戦前との断絶の上に立つ全く新しいもののように思える。

しかし実際はそうではない。食事の場と調理の場の開放的連続ないし一体化は農家の土間+ダイドコロ・ヒロマ等として既に存在していたし、北川圭子著の「ダイニング・キッチンはこうして誕生した」等で述べられているように、希ではあるが戦前にも食事室兼台所の設計例はあった。また、明治中期頃から欧米的な私生活の場としての「家庭・ホーム」を重視する動きが現われ、明治後期から昭和期にかけての生活改善運動、住宅改善運動の中では概ね次のような改善・改良の方向が目指されていた。即ち、(1)部屋の独立性のなさへの批判——遮音性のなさや居室通り抜け動線の克服、(2)接客本位の住居から家族本位の住居への転換、(3)ユカ座からイス座への転換、(4)合理性、実用性の追求という4点である。

また、前記シンポジウムで鈴木自身が言及しているように、51C型提案に結びつく戦前の重要な動きとして、食寝分離論の提起に代表される西山卯三の住宅計画の研究がある。事実、藤森照信の「昭和住宅物語」によれば、昭和17年の住宅営団のモデルプ

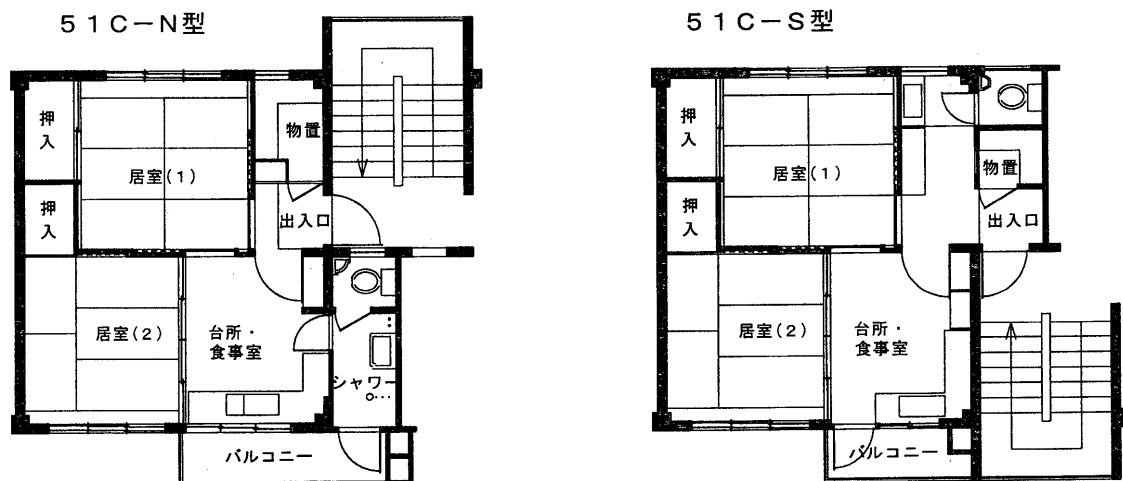


図-1 51C型の原案（「『51C』家族を容れるハコの戦後と現在」より）

ラン作成において、西山は同僚の森田茂介とともに食事室兼台所を持つ住戸プランを提示したという。机上のプランとしては既に昭和17年の時点でダイニングキッチン（DK）の原形が提案されていたということである。戦争が上述のような明治期からの日本の住宅の改革の動きを中断してしまっただが、それらと無関係に51C型を始めとする戦後における新しい住居理念・住宅像の提案があるわけではないという点は、改めて指摘しておくべきことであろう。

戦後の民主化、経済復興の動きの中で、私生活の場としての家庭的家族が成立する基盤が生まれ、住宅改善運動が目指していた家族本位で合理的な住居をつくる一つの条件が生まれた。更に、戦争による膨大な住宅不足と資材・経済力不足が、この合理性追求の必要性を極限にまで高めていた。51C型はこのような状況下で誕生したのである。そこには様々な意味がこめられているが、基本は先述したように、狭小な住戸規模という条件下での食寝分離と就寝分離（特に親と子のそれ）の実現ということである。これに加えて、当時盛んに主張された台所の改善、家事労働の合理化やプライバシーの重視がそこから読みとれよう。食事室+二つの寝室+台所という住居規模の確保が困難な状況下で、食事の場を板の間とし、これを台所と一体化して食事室兼台所とすることで食寝分離を保証しつつ、調理等にかかわる動線の短縮を可能にし、二寝室を壁で区切ることによって、各々独立性を持たせて就寝分離を実現しようとしたのである。食事の場を板の間としたことは住宅改善運動以来の、ユカ座からイス座への転換という流れの反映であるかも知れない。また、バルコニーや出入口脇の物置の設置にも見るべき所がある。

このように51C型は、戦前からの住宅改革の流れを一定受け継ぎつつ、戦後間もない時期の厳しい条件下で、食寝分離や就寝分離を主軸としながらも、プライバシーの確保、動線の合理性からバルコニーや物置等の副次的、従的空間にまで配慮して、よりよい住生活の実現を目指して提案されたものと言えるだろう。そこには今日よく批判されるような、「近代家族を容れるハコとしてつくられた」という抽象的な性格はない。それは「庶民住宅の過去が教えるもの」（「国際建築」1954年1月号）という論文の中で、鈴木成文が「住宅」なのだから、まず何をおいても就寝室・食事室の確保を、そしてより根本的には人間生活を大事にするという態度を貫いてほしいと思う。これがわれわれの願いである。」と書いている所からも明らかであろう。

ただ、住戸規模等の厳しい条件もあってか、戦前の中廊下型住宅にみられた住居の対社会性機能、対社会コミュニケーションの場への配慮は全く希薄で

あり、住居集合の課題への目配りも抑制されていた。更に1955年に設立された日本住宅公団によって、この食事室兼台所に「ダイニングキッチン」というおしゃれなネーミングが施され、'57年からのステンレス流し台の導入によって、DKは庶民にとって一種の憧れともなっていく。その結果、狭小な住戸規模という条件下で考案された空間の型が、そうではない規模条件の住居にもとり入れられていくということになった。このようにして51C型の理念、プランは戦後の住宅に非常に大きな影響を与えていったのである。

## 2-2 モダンリビング

51C型は計画学の研究者による提案であるが、戦後日本の住宅改革についてはむしろ建築家も手を挙げていたわけではない。彼等の提案は先ず建築ジャーナリズム上でのコンペ等を通して世に訴えられた。例えば1946年1月の復刊第1号で西山卯三の「新日本の住宅建設」を特集した「新建築」は、1948年には1月号の「新住居特輯」の他、3回の住宅コンペ特集を組んでいる。コンペのテーマは「12坪木造国民住宅」、「家庭労働の削減を主体とする新住宅」、「育児を主たるテーマとする15坪国民住宅」である。

入選したプランを見るとその殆どがイス座式の居間や食事室（スペース）を設けている。当時の国民の多くは茶の間でユカ座式の食事をとっていたと考えられるが、戦前の住宅改善運動以来のユカ座からイス座への転換という課題は、建築家の間でも相当強く意識されていたのであろう。そしてこのイス座式の居間、食事室（スペース）と台所との関係を調べるとその多く（62%）が今日言う所のLD・Kというパターンである。LDKやL・DKも各々10%強あり、既に1948年時点でもイス座式の食事室兼台所という空間像はかなりの建築家の頭の中に存在していたと

表-1 1948年「新建築」誌  
住宅コンペ入選作等のプラン

	L・D・K	LD・K	L・DK	LDK	その他のLDK	L・K 茶の間等	合計
1月号	3 18.8	6 37.5	1 6.3	2 12.5	1 6.3	3 18.8	16
4月号	—	8 66.7	1 8.3	1 8.3	—	2 16.7	12
8月号	—	13 76.5	4 23.5	—	—	—	17
11・12月 合併号	1 4.2	6 66.7	2 8.3	4 16.7	—	1 4.2	24
合計	4 5.8	43 62.3	8 11.6	7 10.1	1 1.4	6 8.7	69

いうことである。

「新建築」の1953年12月号には小林清が「食事室の研究」という論文を書いているが、そこでは「ダイニング・キッチン」や「リビング・キッチン」という言葉が既に使われており、前者については「台所の中で食事をするもの、台所に接続して食事部分を設けたもの。ブレクファスト・ルームも此に属する」との説明が、後者には「居間の中に台所を設け、それに接近して食事部分を設ける」との説明が付されている。「ブレクファスト・ルーム」という言葉を使っている点にも示されているが、この論文自体が「最近家の造り方が根本から変わって来て——アメリカの影響を多分に受けて、生活を合理的に、知的に、又、主婦の労力を出来るだけ少なくしようと云うアイデアからいろいろな形式のものがあらわれて来ている」という問題意識で書かれたものである。ここに述べられているように、確かにアメリカの影響は大きかった。1951年には「新建築」や「国際建築」誌上で、アメリカのNAHBの住宅コンペが紹介されている。その多くはL・D・KやLD・Kといったプランだが、子どもの生活に配慮したオール・パーパスルームの設置、通路面積の削減、構造や設備への目配り等、生活への対応を考慮した合理主義的傾向が強く現われたものであった。

このような建築家による住宅革新の動きは1950年に住宅金融公庫法が制定されたことによって、限定された範囲ではあったが、単なる誌上の提案を超えた実現へのルートが開かれ、こうした局面で、1951年に建築家池辺陽を中心に「モダン・リビング」(「modan living」)という雑誌が創られる。これは上述の、戦後における建築家による住宅改革・革新の動きをまとめ、啓蒙するという点では大きな意味を持ち、後にこの時代に主張され、つくられた住宅像や考え方一般をモダンリビングと呼ぶようになった。結果的に非常に大きな幅を持って解釈され、様々に議論されたモダンリビングであるが、上に述べたように、その基盤には51C型と同様に小規模な住宅を前提として住生活への合理的対応を図るという理念があったと考える。

1951年7月の「モダン・リビング」創刊号では池辺陽他5人の建築家が「住みよい部屋の構成」を論じているが、その項目は、「家族みんなが集まる部屋」、「主婦の働く場所」、「寝室」、「便所・浴室・洗面所」、「子供の部屋」、「玄関」、「物をしまう場所」、「老人の部屋」の八項であり、これとは別に「設計のまとめ方」と庭の設計にも触れている。そしてこの「住みよい部屋の構成」の前文には「家族本位で、生活本位であること。……この二つの条件があなたの暮しに近代性をもたせるかど

うかの重要な鍵なのです。あなたの生活を掘り下げるところからモダンリビングは展げてくるのです。」と述べられている。また上記の八項目の中で最も多くのページを割かれてあるのは「家族みんなが集まる部屋」であるが、そこでも「要するに、モダン・リビングとは自分の生活を科学的によく考え、いままでの習慣や流行にとらわれずに、家族の生活を楽にしてゆく方法を発見し、実行してゆく生活です」とされ、更には「モダン・リビングには定まった型はないのです」とさえ書かれている。確かにモダンリビングには51C型のようなはっきりとした空間の型や食寝分離と就寝分離を主軸にするといった明瞭な理念はなく、後年多様な解釈がなされるわけだが、それでも創刊号に述べられている所からはその中核的考え方を抽出することが可能である。それは概ね以下のようにまとめることができよう。

1. 家族の集まり部屋であると同時に客を迎える場でもある居間を持つ。食事室は居間の近く、或いは居間の一角に設ける。
2. 夫婦寝室や子供部屋等の私室をキッチンと持つ。
3. 家事労働の軽減を図る。
4. 台所、便所・浴室・洗面等で近代的設備を整える。
5. イス座を主体とする。

これらは先述のように「家族本位で生活本位」という点にまとめられるであろうが、生活といっても食・寝・だんらん・接客だけでなく、収納や玄関にも目配りがなされ、家族といっても老人室に一項が割かれているように、核家族だけを対象とした狭い思考ではなかった。近年、51Cまで遡って、nLDKは近代家族を容れるハコであったという抽象的解釈が広まっているが、上に述べて来たように、原初にあっては、総じて具体的で幅広い内容で生活との対応が重視されていたのである。

### 2-3 公私室型

1955年に発足した日本住宅公団は高度経済成長を支えるホワイトカラー層のために、大都市周辺に大規模な団地開発を行い、大量の集合住宅を建設していった。その住戸設計に際しては公営住宅や公務員住宅での経験が一定活かされ、食寝分離を図るためにイス座式の食事室兼台所を設けることとなり、既述のようにダイニングキッチンと命名され、より快適性を増すためにステンレス流し台も導入された。またそれだけでなく、各戸に浴室が設けられ、スチール製のドアとシリンドー錠によって容易にプライバシーを守ることができ、当時の住宅事情の中では、大いにその近代性を謳うことができた。

公営住宅では1949年から標準設計が実施されてい

だが、公団住宅においても同様に標準設計という形で幾つかの型系列がつくられていった。この型の名称として、ダイニングキッチンにはDK、台所にはK、寝室となり得る部屋の数には数字が付されるという方式で、例えば2寝室+ダイニングキッチンの場合は2DK、1寝室+台所の場合は1K等と表記された。発足当初は2DKや2Kが圧倒的に多かったが、3寝室型に手を伸ばしたかった公団は、総予算が限定されていたため1Kや1DKを増やしつつまずは3Kを実現し、次いで3DKへと進み、2～3年のうちに1K～3DKまでの型系列をつくり上げた。

しかしそうした型系列が整えられた1950年代末には住宅計画研究者の中に、このようにただ寝室数を増やしていく公団の型系列への疑問が生まれ、住み方調査を通して新しい住生活の方向やそれに沿った住空間の型を明らかにしようという動きが始まった。

例えば服部千之は「アパートにおける居住の型」(1959年10月「日本建築学会論文報告集」第63号)で「戦後、食寝分離のプランニングは、ホワイト・カラー層におけるML(モダン・リビング)的生活様式の発展に対応して、特に公団住宅において積極的にとりあげられたダイニングキッチンをもつ2DK型をつくり出した。しかし2DKがさらに規模を大きくする場合、3Kとなるべきか2LKとすべきといった点については、不明な所があり、一つの停滞的戸まどいを感じられる。」として公団名古屋支所の団地の住み方調査のレポートを行っている。そして、居住の型として「居間型(公私室型):食事・団らん・接客などの公生活の部分と私生活(寝室)とがはっきり空間的にわけられている型」を抽出し、「たとえば最初から食・寝空間だけでなく、リビングのあり方もとりあげたプランニング理論の必要な段階に来ている。」と結論づけている。

同じ「日本建築学会論文報告集」第63号において、扇田信は論文のタイトルに「公私室型」という言葉を用いている。「公私室型住宅の分析」というもので、そこでは「公私室型住宅は戦後モダンリビング形式として、国民階層のホワイトカラー層に浸透してきた。この住空間形式は家庭内においても公と私をわけることにより1つの住生活秩序をつくりだすことを目的としている。その意味で従来の食寝分離やまして接客分離的な空間形式とは質的に異なった、それより1段進歩した近代的な住生活を生み出すということができる。日本の住宅が住生活最低限の秩序化——食寝分離の段階から進歩していく道筋がこの方向にあるとすれば、公私型住空間形式が現在いかに使いこなされているか検討してみる必要がある。」と述べられ、分譲住宅の住み方調査の分析がなされている。

1961年の「日本建築学会論文報告集」第69号では鈴木成文他が「公団アパートにおける公私両空間の分化について——1, 2, 3」という報告を行っている。「その1」には「公団住宅の標準設計は、その原則が食寝分離、就寝分離を軸とした“n・DK型”におかれている。しかし最近の居住者層の変化は、平面計画に新しい要求を生みつつある。この研究はとくに高まりつつある居間に対する要求、私室確保の要求について調査し、両者の関係について分析し、標準設計に再検討を加えんとしたものである」と、研究の目的が述べられている。これは後に「建築計画学6 集合住宅住戸」(1971年、丸善)の中に「公団住宅における公・私空間の分化」としてまとめられ、その結論部分では「公団住宅居住者層の生活においては、「食寝分離」・「寝室分解」よりはむしろ、「居間の確立」・「私的空間の確保」が平面計画の主題となりつつある」と述べられている。

こうした住宅計画学研究者の動きは上述の鈴木成文の指摘にあるように、ホワイトカラー層を中心に日本人の住生活に新しい傾向が現われているにもかかわらず、公団住宅の型系列等に示される住宅計画の考え方は2DK以来の食寝分離や就寝分離を主軸としたものであるという矛盾を突いたものであった。扇田信や服部千之の共同研究者であった西山卯三は更にこれに住宅階層論や住意識、住様式論を加味した「住空間の型」という論文を「新建築」(1959年5月号)に発表している。その冒頭には「日本の小住宅のプランニングは、戦後すっかりかわった。かわったばかりではなく、一つの新しい型をつくりだした。私はそれを「モダン・リビング」と呼びたい。モダン・リビングの出現は日本の住宅史にとってまさに歴史的画期であり、——現在生産技術やいくつかの生活分野でおこなわれつつある変革と同じように——《住宅革新》とよぶことができよう」と述べている。そしてその中核ともなる節で、「戦後のモダン・リビングのもっとも基本的なパターンは《公私室型》である。住宅の中心はリビング《居間》にある。そこはたいてい洋風のイスザ式空間で、活動的な生活、家生活の中では《公》の生活——家族いっしょの団らんや食事、テレビをみたり手しごとをしたり、そして来客があると気になるとおす空間である。この「公室」をとりまいて、プライベートな、おのおの隔離された寝室がある。プライベートな寝室と、リビングのような公室とがはっきりと分けられ、公室が住空間の中心になっている。」と公私室型について説明している。

つまり西山卯三は、戦前とは異なる戦後の小住宅の革新的型としてモダンリビングを広くとらえ、その基本的パターンを公私室型としているのである。

このことは例えば西山の代表的著作である「日本のすまい」の第2巻・第8章「戦後の住宅革新」の中の「公私室型の形成」という節で、前にふれた「新建築」1948年4月号の「12坪木造国民住宅」コンペ入選案をとりあげていることから明らかである。また同書の第13章は「モダンリビング」と題され、その冒頭に「戦後の住宅の支配的な空間構成を公私室型と規定する」旨の文章があり、公室や私室という言葉の意味、イス座化への動きや台所の改善、ダイニングキッチン等、非常に幅広い内容で書かれ、次の第14章「公私室型の展開」へとつながれている。そしてこの章でも西山は「公私室型の定着」や「展開」にふれたあとに、池辺陽の活動を中心しつつ、清家清や菊竹清訓等の建築家の設計や理論、アメリカの革新的住宅やNAHBのコンペの影響等、まさにモダンリビングという言葉で表わされる多様な内容について語っている。

即ち、公私室型の理念は、一方では51C型に代表される食寝分離や就寝分離への対応を主軸とした住居型の安易な踏襲、固定化やその限界への批判から生まれ、他方では「家族本位で生活本位」という戦後の革新的住宅像たるモダンリビングの中から、リビングルームに代表される公室・公的空間と、寝室に代表される私室・私的空間をはっきりと分ける空間構成原理を主流としてとらえるという見方から生まれたと考えられる。このような空間構成原理が生まれてきた背景を前掲の「住空間の型」の中で西山卯三は次のように説明している。「このようなタイプの住空間の秩序化の原理がうまれてきたのは、食寝分離論がたてられた当時には存在しなかった、いくつかの戦後の重要な社会的変革を反映してのことである。敗戦後は明治維新の後にもこのこされていた古い封建的な家父長制家族制度が否定され、家族の中で1個の独立した人間としてはみとめられなかった家長以外の青少年やその他の従属扶養者に対する身分的隷属関係がとりのぞかれた。それが逆に家長をふくめて夫婦生活の確立にはねかえり、青年子女や夫婦の私室を確立することが意識的に求められるようになった。私室の確立は同時に他方、家族全体のあつまる空間：居間＝《公室》の必要をおしだした。」

即ち、戦後の民主化による平等意識がプライバシー意識を高め、それが住居における私室確立への要求を明確化し、その結果として公室も求められるようになったというのである。「日本のすまい」第2巻第13章で西山は、「戦後の住空間の分化過程の一番大きな特徴は、家族個人個人のプライバシーの確立、私生活の確立が求められるようになったということである。」とし、「戦後の住空間は、生活の中

から私的な部分（プライバシーの必要なプライベート部分およびそれにくつつく若干の生活）が抜き出され、それがはっきりと確立されてゆくプロセスで、住空間が私的空間と、それがぬきだされたあとにのこる私的でないノン・プライベートな、公的空間とで構成されるようになってきた」と述べている。このように公私室型は、計画理念としては食寝分離・就寝分離を主軸とする空間構成原理から一歩進んだ、公室・公的空間と私室・私的空間を明確に分ける空間構成原理という内容を持っていたが、生活や意識の実態としては私室・私的空間が優先される形で広まっていったと考えられる。また公室・公的空間と言いながら、先にあげた扇田信や鈴木成文の研究の中では、接客については全く、或いは殆どふれられていない。事実鈴木は「現代日本の住宅」（「東京大学公開講座11 家」所載、1968年）で、「公的といっても家庭内での公的生活、すなわち家族が集まる団らんや食事などの生活行為をさし、一方私的とは各個人の生活、夫婦や子供たちの就寝・勉強などの生活行為をさす」と述べている。しかし他方では上述の西山卯三のように公とは接客を含むノン・プライベートな行為全般をさすとする説明もあり、公のとらえ方の中に公私室型理念のあいまいさがあつたと言える。ただ、1960年代後半からの一般的都市住居にリビングルームを広めてゆき、nLDKという言葉を生み出した基盤にモダンリビングや公私室型があつたのは確かであろう。

### 3. まとめ

1945年の敗戦は一方では住宅事情の極端な悪果をもたらしたが、他方では生活全般にかかわって新しい考え方や制度をももたらした。そうした中で戦後の小住宅における住宅革新が進められたが、それは全く戦前と断絶したものではなく、かつての生活改善、住宅改善運動や誕生間もない住宅計画学の成果を一定継承するものであつた。そこには51C型、モダンリビング、公私室型という三つの代表的理念の提案があつた。いずれにも共通するのは生活の重視、生活に対応した空間構成を志向していた点である。これらは結果的にはnLDKにつながり、今日では近代家族を容れるハコとして計画されたものといった批判が罷り通っているが、原初においては決してそのような抽象的なものではなく、具体的に住生活を対象化し、それに対応しようとするものであつた。ただ、51C型は余りにも限定的な目標レベルに応じたものであつたし、モダンリビングや公私室型は逆に理念的にあいまいな面があり、そこを具体的に超えて内容を展開できなかつた所に後年の批判を招く弱点があつたと考えられる。